

◎野木京子

水のないプールにも浮かぶ悲しみ 宇井 麻千（大阪府）

*水のないプールは存在自体が悲しい。役目を果たしていないのだから。悲しみは物質ではないから水に浮かばないし、水がなければ何も浮かばない。ありえないことが描かれ、現実を超えた広がりを感じさせられる。水のないプールとは“心”の比喩なのだろう。

母の指輪をつけている妹 合川秋穂（京都府）

*説明なしにさらりと一行で書かれているゆえに感じさせる深みと大きさ。指輪は母の遺品か。とすれば、書かれていないけれども、背後には母の死と、それへの悲しみがある。

ずっと前からちよくちよくと
夢に現れる君の用件知りたい 風船（東京都）

*夢の中で出会う人に用件を聞きたいという、現実と夢幻の境界の曖昧さが面白い。風船さんは「必ず流れる年末の今年亡くなった／著名人偲ぶ番組／今年は絶対見られない」という、自死した俳優への悲しみをうたった詩もあり、心に迫った。

我生きる君のいる空高きまま 長谷川柊香（宮城県）

*「君」は、亡くなった友人のことか。空は、見えているのに遠く、手を伸ばしてもけっして届かない。頭上に異世界を感じながら、わたしたちはこの地表で生き続けている。

今の僕は
マトリョーシカの
二番めくらい

佐々木佑輔（埼玉県）

*マトリョーシカは、おなじ人形の重なりだけど、開けるたびに真実が出てくるような気がしてドキドキする。一皮むけて成長していくことと、だんだん小さくなって無に近づいていくこととの、二重のイメージ。読者は、自分なら何番目くらいだろうと、つい、立ち止まってしまう。

自分のアルバムから
飛び出してきたみたいな
小さな
私の愛しいひと

きやま いと（兵庫県）

*ほのぼのと温かな気持ちになる。お子さんへの愛情をうたっている詩。子どもを育てることで、自分の人生を生き直すことができるようにも思う。

始発電車から見えた病院の明かり
看護師が廊下を走っていた

宇井 麻千（大阪府）

*一瞬の亀裂のような時間をとらえる、すぐれて映像的な詩。早朝、看護師はなぜ走っていたのか。それは作者にも読者にもわからないままだが、きっと重大な理由があったはず。知ることができない世界の大きさ。

カーテンをずっと閉めている
部屋にいて

声に出せない悲しさなども

音無 早矢（北海道）

*「声に出せない悲しさなども」の「なども」と、余韻を残す形で終えているのがこの詩の命。悲しさも一緒に部屋にいるなのか、悲しさもカーテンを閉めているのか。書かれていないゆえに、広がる世界。

自然観察部の息子を持つと

玄関が川の匂いがする

板倉萌（兵庫県）

*川が自宅玄関まで蛇行して流れ込んできたかのような、味わい深さと面白さ。嗅覚も刺激される。二行目、「が」が二回出てくる。そこが少し落ち着き悪い感じもした。

竹の代わりに

竹輪くわえて

憧れの鬼になる幼女

春町 美月（大阪府）

*この詩の意味を、鈍い私は、何のことだろうかとしばし考えた。三分経って気が付いた。禰豆子のことなのですね。鈍くてごめんなさい。そのことに気付くと、なんとも面白い。神妙な顔をしている女の子の姿が見えるようだし、ちくわの味も口の中に広がる。

冬至がくる

だんだん

昼間が

短い

ね

加藤 美紀（愛知県）

*加藤さんは伸びやかに自由な作風で、さまざまな詩を書かれている。この詩は遊び心もあって、真冬が近づく寂しさも表現されていて、面白い。

君が産まれた瞬間を想像で補う

伊丹真（東京都）

*「君」はだれのことだろう。恋人かもしれないし、自分のことかもしれない。あるいは、淡い関係でしかない人のことかもしれない。町ですれ違う大人も子供も、みんなに「産まれた瞬間」があるのだなと想像すると、他人に対して、豊かで優しい気持ちになれる。